

「地域安全学 夏の学校2016 一基礎から学ぶ防災・減災ー」： 地域安全学領域における若手人材育成 その1

Summer School 2016 of Social Safety Science – Basic Lectures of Disaster Science - :
Young Human Resource Development of ISSS, Part 1

○佐藤 翔輔¹, 松川 杏寧², 杉安 和也¹, 藤生 慎³, 寅屋敷 哲也¹, 河本 尋子⁴
 Shosuke SATO¹, Anna MATSUKAWA², Kazuya SUGIYASU¹, Makoto FUJIU³,
 Tetsuya TORAYASHIKI¹ and Hiroko KOMOTO⁴

¹東北大学 災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

²人と防災未来センター

Disaster Reduction and Human Renovation Institution

³金沢大学 理工研究域

College of Science and Engineering, Kanazawa University

⁴常葉大学大学院 環境防災研究科

Graduate School of Environment and Disaster Research, Tokoha University

Recently, Institute of Social Safety Science (ISSS) including other disaster science community has two problems: 1) Beginners have a hard time because there are many basic knowledge and research methods to understand in disaster science. 2) Number of student member as first authors of peer-reviewed papers in ISSS have been gradually decreasing. So, we have held “Summer School 2016 of Social Safety Science” in 7th, August, 2016, at Tohoku University to develop young human resource that consists of lecture basic disaster science and making human network. The report aimed to report the summer school and clear next summer school plan.

Keywords : summer school, Institute of Social Safety Science, young scientist, student, human resource development, human network

1. はじめに

地域安全学は、災害、防災・減災、復旧・復興、犯罪・防犯、事故、危機管理など、概念や分析手法が多岐にわたる。地域安全学を学ぼうとする初学者にとって、「どこから手を付ければいいか」悩ましいところがある。

さらに、地域安全学会では学生による研究発表が徐々に減少傾向を示している。図1は、1999年に地域安全学会の査読論文集（地域安全学会論文集）が発行されて以降、筆頭著者の会員種別を分けて、その論文数と比率を示したものである（一部、推定を含む）。図中の破線は、それぞれの論文数を回帰した直線である。全体トレンドとして、査読論文の筆頭著者に学生が占める割合は、徐々に減少しており（正会員が占める割合は、徐々に増加しており）、学生による発表がやや低調になってきている。

著者らは、このような状況を鑑み、「地域安全学 夏の学校」（主催：安全・安心若手研究会）を企画し、開催することにした。「地域安全学 夏の学校」は、大学生・大学院生を主な対象として、一流の研究者が講義や演習を行うセミナーとした。「地域安全学を学ぶきっかけ」や「地域安全学の基礎を短い時間で効率的に学ぶ機会」とすることをねらいにしている。

本稿では、初回となった「地域安全学 夏の学校 2016 一基礎から学ぶ防災・減災ー」の内容とその結果を報告する。

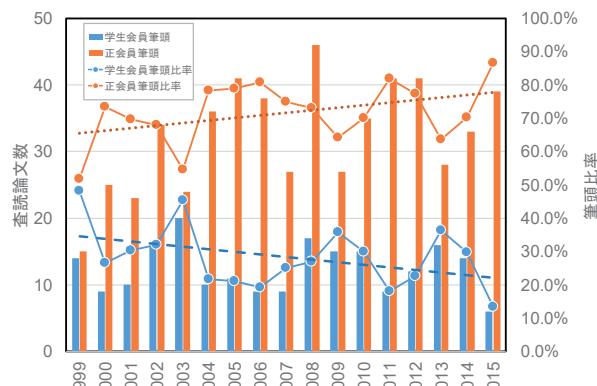


図1 地域安全学会論文集に掲載されている論文の筆頭著者の会員種別(論文数、比率)※推定を含む

2. 開催内容：各学会の「夏の学校」の比較

「地域安全学 夏の学校 2016」は初回であることから、1日完結型（日帰り可）で、3名の講師による講義形式のみのセミナーとして開催した。主な対象は大学生・大学院生であるが、広く参加いただけるように制限は設けていない。職種も実務者・研究者を問うてない。著者が「安全・安心若手研究会」の世話役として、今回の夏の学校の事務局をつとめた。開催の内容を下記に示す：

- 1) 日時：2016年8月7日（日）10:00～17:00

- 2) 会場：東北大学災害科学国際研究所（宮城県仙台市）
 3) プログラム
 10:00～10:10 開会
 10:10～12:00 大阪市立大学 宮野道雄教授
 　　「建築学と防災・減災」
 12:00～13:00 昼食（ソーシャルランチ）
 13:00～14:50 同志社大学 立木茂雄教授
 　　「社会学と防災・減災」
 15:00～16:50 常葉大学 重川希志依教授
 　　「エヌノグラフィーと防災・減災」
 16:50～17:00 閉会

今回の講師は、夏の学校開催時点で、地域安全学会の会長歴任者の直近3名とした。結果として、理工系・人文社会系のバランスがとれた。初学者を対象にしていることから、講師には、各分野の基礎を「分かりやすく」講義していただくよう要望した。なお、講師の先生方は、「若手のため」と、この度手弁当でご参加いただいた。ソーシャルランチ（互いに面識のない人が昼食をともにとる）では、会話を促進するために、会話のテーマを記したサイコロを用意した。図2にソーシャルランチで用いたサイコロの目を示した。なお、参加者の昼食は、地域安全学会から助成いただいた。

表1に、他の夏の学校と「地域安全学 夏の学校 2016」との開催内容等の比較を示す。他の夏の学校については、ここ数年の開催概要を参考にして示している^{1)～3)}。

写真1と写真2に、それぞれ講義と昼食の当日の様子を示す。

なお、告知は1) 地域安全学会のウェブサイト、2) 関連する学会からのメーリングリストを通して行った（地域安全学会、日本自然災害学会、日本災害復興学会）。

3. 結果

本章では、参加者の申込み内容や事後の質問紙調査の結果について述べる。参加申込みは65名で、61名が当日参加し、46名からの回答を得た。

図3に参加者の性別、図4に参加者の年齢（年代）、図5に参加者の立派（学生、教員・研究員、民間）を示した。10～30代が半数以上（66%）、学生の参加が大半（72%）を占めていることから、「初学者向け、若手向け」の目標を概ね達成されたと言える。一方で、間口を広げたことにより、40代以上や民間からの参加があつたことは特筆すべき点である。

図6に参加者の居住地（都道府県別、所属先から同定）を示している。図中のその他は、1名ずつの都道府県で、山形県、新潟県、埼玉県、神奈川県、京都府、大阪府が該当している。約半数は宮城県が占めており、最も多く（44%）、次に東京都（18%）、石川県（10%）とつづく。参加者の居住地は、1) 開催会場に近いこと（宮城県）、2) 開催会場へのアクセスが良いこと（東京都）、3) 世話役の所属内もしくは近いこと（宮城県、石川県）に、強く影響を受けていることが推察され、今後の開催地選定において、配慮すべき重要なポイントであることが伺える。また、開催日前日の「地域安全学会 東日本大震災連続ワークショップ 2016 in 石巻」であり、同ワークショップにつづいて参加した人がいたが、その人数は13名（21.7%）とそれほど多くはなかった。

図7に参加者の所属学会（複数記入可）の集計結果を示した。地域安全学会の10名が最も多い、土木学会が6名、日本建築学会が5名とつづく、メーリングリストか



図2 ソーシャルランチのサイコロ

表1 各夏の学校の比較

	地震学夏の学校	天文・天体物理若手夏の学校	気象夏の学校	地域安全学夏の学校
主催	日本地震学会	天文・天体物理若手の会	日本気象学会 気象夏の学校実行委員会	安全・安心若手研究会
初回開催	1995年	1971年	1989年	2016年
開催時期	9月	7月	9月	8月
世話人	3名(各回交代)	13名(各回交代)	主幹大学の学生会員院生	6名
日程	2泊3日	3泊4日	2泊3日	1日
参加費	10,000円	34,000円	16,000円	0円
参加規模	約40～80名	約250名	約150名	約60名
内容	講演・講義、グループ実習、観察、研究発表(ポスター)	講演・講義、研究発表(口頭・ポスター)、チュートリアル・セミナー	講演・講義、研究発表	講演・講義
特記事項	・毎年「テーマ」を設定して、講演者を選定	・企業・個人から寄附 ・アワード	・気象海洋夏の学校として合同開催する年あり	・地域安全学会からの助成 ・講師手弁当



写真1 当日の様子(講義)



写真2 当日の様子(ソーシャルランチ)

らの案内を利用した日本自然災害学会と日本災害復興学会に所属している参加者は、それほど多くならなかった（いずれも3名）。

図7で特筆すべき点は、参加者が所属している35学会があったことある。参加者の中で、学会に所属している人は31名いたことから、関連している学会の多様性がう

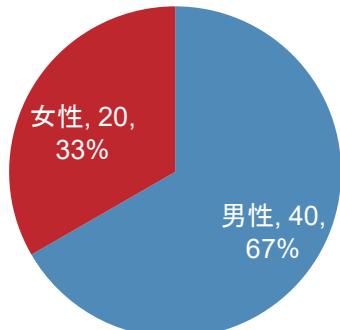


図3 参加者の性別

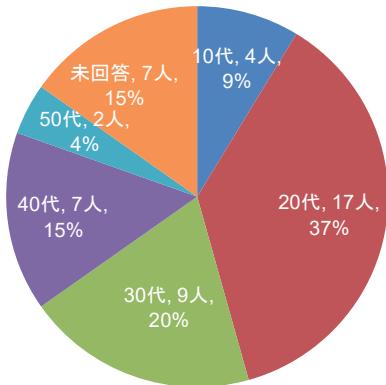


図4 参加者の年齢(年代)

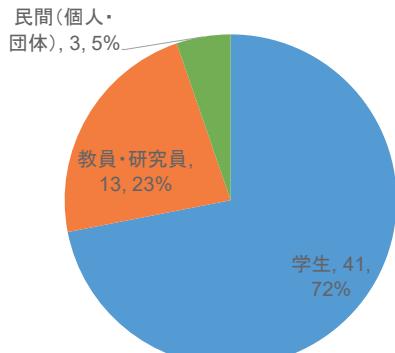


図5 参加者の立場

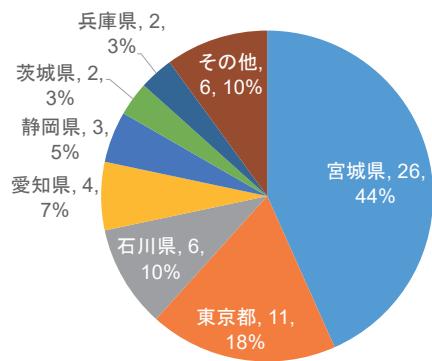


図6 参加者の居住地(都道府県別)

かがえる。図5で「それ以外（各1名）」となっている学会は次の通りであった：犯罪社会学会、日本養護教諭教育学会、日本評価学会、日本犯罪社会学会、日本都市計画学会、日本社会病理学会、日本思想学会、日本灾害食学会、日本健康相談活動学会、日本看護教育学会、日本看護科学学会、日本学校保健学会、日本火山学会、日本マス・コミュニケーション学会、日本キャリアデザイ

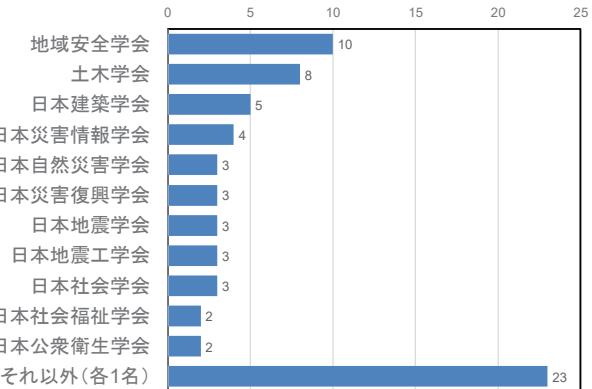


図7 参加者の所属学会(自由回答, MA)

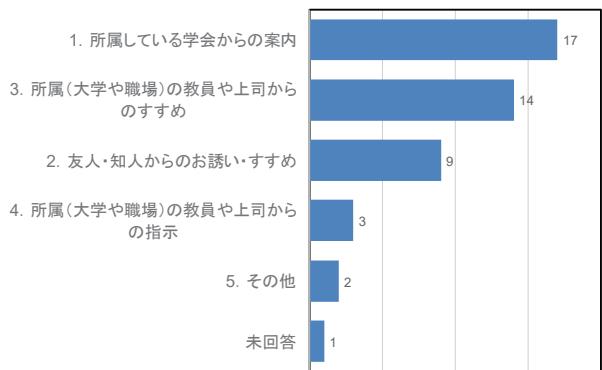


図8 「地域安全学 夏の学校 2016」に申し込んだ経緯(MA)

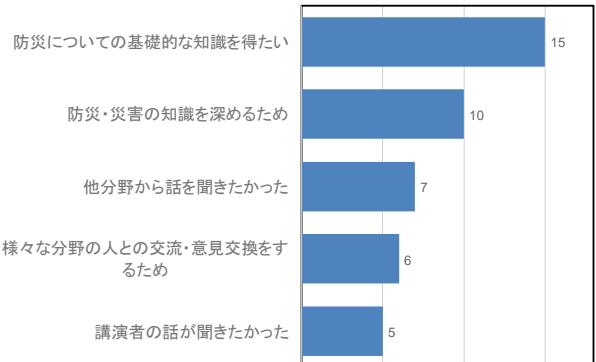


図9 「地域安全学 夏の学校 2016」への参加目的・期待

ン学会、日本NPO学会、電子情報通信学会、組織学会、教育システム情報学会、環境社会学会、International Society for Third-Sector Research (ISTSRR)、The Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc. (IEEE)、Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action (ARNOVA)、ほか読み取り不可1件。

これと併せて、参加者の「専門分野」についても自由回答形式、複数記入可で問うている。表記ゆれを調整するなどの内容分析を行ったところ、次のような結果となた（括弧内の数字は人数）：防災・減災（10）、社会学（7）、社会福祉（4）、防災教育・教育学（3）、建築学（3）、医療・看護（2）、復興：生活再建（2）、土木計画学（2）、都市計画（2）、危機管理（2）、以下、1名ずつ：災害報道、日本思想史、津波工学、情報科学、災害食、交通工学、経営学、企業防災。

図8に、「地域安全学 夏の学校 2016」に申し込んだ経緯を複数回答で問うた結果を回答人数降順で示した。

「所属している学会からの案内」が17名と最も多い。前述の3学会と想像されるが、これが最も大きな告知方法

であることが分かった。また、「所属の教員・上司からのすすめ」が14名、「友人や知人からの誘い・すすめ」が9名と、口コミによるものも多い。

図9に参加した目標や期待について自由回答で問うた結果を内容分析した結果を降順で示した。「基礎から学ぶ防災・減災」という本企画のサブタイトルに整合しているように、「防災についての基礎的な知識を得たい」が15名と最も多く、関連するように「防災・災害の知識を深めるため」が10名とつづく。今後の防災・減災に関する基礎的な内容を講義する内容が求められる。

図10に「地域安全学 夏の学校 2016」の参加者個人の成果について、計7問の「非常にそう思う—ややそう思う—どちらともいえない—あまりそう思わない—全くそう思わない」の5段階で問うた結果を、得点（各回答の番号を点数として平均した値）の降順で示した。

「7. 自身の今後の活動や研究に活かせる内容であった」と「1. 防災・減災に関する基礎的な知識が身に着けられた」は、得点が同じ（4.56）で最も高かった。今後の研究に活かすことや、基礎的な知識を身に着けられたことは、本企画の達成目標に合致している。「3. 期待していた内容であった」「4. 周りの友人や知人にもすすめたいと思った」「6. 講義の内容は理解しやすかった」「5. 自分の知識や経験のレベルに適切な難易度であった」の得点の得点はいずれも4.00以上であり、高い満足度が得られていると言える（それぞれ4.45, 4.42, 4.42, 4.13）。一方で、「2. 受講者同士で、人的ネットワークをつくることができた」の得点は3.76であり、他に比べてやや低い評価となっている。ソーシャルランチ以外での交流企画の必要性を示している。具体案については、後述する。

今後、参加してみたいと思う企画と講義内容について自由回答、複数記入可を問うた結果を内容分析した。参加してみたいと思う企画は次の通りであった（かっこ内の数字は人数）：1) グループワーク形式(3), 2) 情報交換会(2), 3) 今回と同様(2)。

希望する講義内容テーマは次の通りであった（かっこ内の数字は人数）：1) 複数要望があったもの：災害復興(5), 行政対応(2), 災害心理(2), 2) それ以外：各ハザードの災害、災害経済、災害法制、フィールドワーク技法、民俗学、犯罪、避難訓練、防災教育。

その他、参加者から寄せられた自由回答は次の通りである（かっこ内の数字は人数）：1) 気持ちよく参加することができた(9), 2) お弁当がありがたかった(3), 3) 場所がわかりにくいため、会場案内を事前に送ってほしかった(2), 4) 懇親会を設けてほしい(1), 5) 参加者のネームプレートが欲しい(1)。

参加者からは「学部生で参加するのが不安だったが、実際にはとても参加しやすかった。」「ランチなどに工夫があり、気持ちよく参加することができた。」「参加無料なのに、とても充実した内容だった。」「多くの学び、気づきがあった。」などの感想をいただいた。

4. アウトカムと今後の方針

今回の企画の重要なアウトカムとして、1) 地域安全学会の会員に5名、2) 安全・安心若手研究会に会員に9名、新たに入会したことにある。参加者には、地域安全学会と安全・安心分けて研究会の入会申込書も併せて配布していた。このことと、企画の体験そのものを通して、以上の入会につながったものと考えられる。

ここまで結果・ふりかえりをもとに、次回の「地域

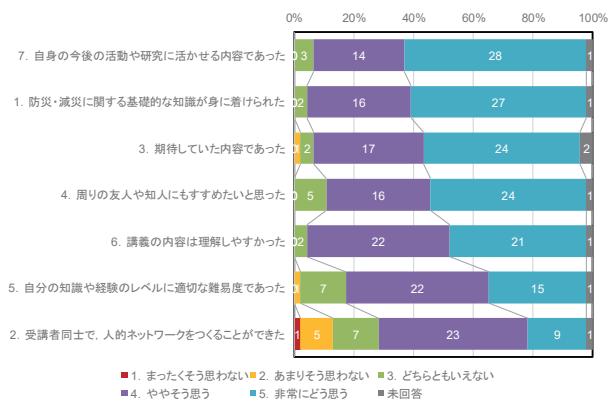


図10 参加者の成果認識(選択式, SA, 得点降順)

安全学 夏の学校」の方針を次の通りまとめる：

- 1) 内容(1)：2016年度参加者の要望を中心に、ひきつづき基礎的な内容を扱う講義を継続する（2016年度と同様）
- 2) 内容(2)：交流や情報交換のニーズがあったことから、グループワーク、プレゼンテーション、懇親会などの参加者同士のコミュニケーションを行う企画を盛り込む（2017年度新規）。
- 3) 開催地：当面、多くの参加人数が望める東京やアクセスしやすい場所にする。
- 4) 告知：地域安全学会に限らず、関連する学会も対象にする（2016年度と同様）。
- 5) その他：昼食の無料配布といった、経済的負担・補助は好評であり、学生参加に効果があることが明らかになったことから、今後も継続していく。

他の夏の学校では、宿泊をともなう企画（合宿形式）が多い（表1）が、今回の参加者からは、このような要望はなかった。合宿形式の開催有無については、今後の参加人数の規模に応じて検討していく必要がある。

また、真に若手人材の育成ができたか否かは、今回や以降の参加者による論文・研究発表、進路等を調査する必要がある。「地域安全学 夏の学校」の中長期的な機能・効果の検証を今後の課題としたい。

謝辞

「地域安全学 夏の学校 2016」に参加いただいた皆様、講師をつとめていただいた常葉大学・重川希志依教授、大阪市立大学・宮野道雄教授、同志社大学・立木茂雄教授、助成いただいた地域安全学会、告知等でご協力いただいた地域安全学会、日本自然災害学会、日本災害復興学会の事務局の皆様に心よりお礼申し上げます。会場調整や質問紙調査の集計は、東北大学災害科学国際研究所・技術補佐員の後藤さつき氏、早坂真紀氏、森實香純氏、平塚理香氏、五十嵐和美氏のサポートを得た。

参考文献

- 1) 例えば、地震学夏の学校 2016, http://www.zisin.jp/modules/pico/index.php?cat_id=372
- 2) 例えば、2016年度第46回天文・天体物理若手夏の学校, <http://www.astro-wakate.sakura.ne.jp/ss2016/web/>
- 3) 例えば、気象夏の学校 2016, <https://sites.google.com/site/meteorologyss2016/>
- 4) 地域安全学 夏の学校, <https://sites.google.com/site/sssummerschools/>